

「太陽と十字架」(2019. 5. 19)

「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」(マタイ 15:45 新改訳 2017)

横手の春は特別だ。長い冬から目覚めた花々がなんと美しい事か。そして、ひと際太陽が眩しく輝く。先月 27 日(土)、CRJ 春のセミナーが開かれ、顧問の野口誠先生が「父なる神と太陽」と題して講演された。なんとイエス様は太陽を「the sun」ではなく「his sun」と呼ばれたのである。太陽は父なる神の造られたものであり、その御手の中にある。通常は前進するが、ヨシュアの闘いの時はほぼ 1 日ストップし、ヒゼキヤ王の時は 10 度バックしたのである。講演を聞いて太陽を見る目が変わった。あれは私達の父なる神様が輝かせてくれているのだ、と。そして、太陽が私を確実に照らすように、この大いなるお方は私の些細な日常の出来事にも御心を留めていてくださる。そのことを野口先生はユーモラスにご自身の体験を通して証しされた。そして思った。悪人であろうが善人であろうが、神様はすべての人に愛を注いでおられる、と。



また、ヨハネ福音書 3:16 には、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」と記されている。独り子を惜しむことなく死に渡された神とはどういう神か？なかなかストーンと胸に落ちてこなかった。しかし、E. トゥルナイゼンの『牧会学Ⅱ』のなかにすっきりとした表現を見出した。それは「神は、我々人間なしに存在しようとする欲せられない」という表現である。それは溺れる子供のためには命を投げ打って飛び込む父親であり、火の中にいる子供のためには燃え盛る家に飛び込む母親である。「お前なしには生きていけない」という言い方もできよう。こうしてみると思いつくのは、イエス様が昇天される時、「私は世の終わりまでいつもあなた方とともにいる」と言われた意味も、「あなたがたなしには私は生きていようとは思わない」という極めて深い愛の呼びかけであると響いてきた。まさに「インマヌエル(神われらと共にいます)」を御名にされる神は、我らなしには生きてまわらないほどに私たちを愛される神だということである。

横手教会は今年度も主の大いなる祝福を信じて踏み出した。教会の営みにおいても各自の生活においても、よっしゃ！と立ち向かうその力の源は何か。ご自分の太陽を輝かせ、十字架を通して語られるその愛である。いつもここに立ち帰りたい。